

苫小牧市総合教育会議議事録

会 議 名	第7回 苫小牧市総合教育会議
日 時	平成30年3月29日 自 13時30分 至 14時40分
場 所	市役所本庁舎9階第2委員会室
出 席 者	市 長 岩 倉 博 文 教 育 長 和 野 幸 夫 教 育 委 員 上 原 毅 教 育 委 員 佐 藤 郁 子 教 育 委 員 植 木 忠 夫 教 育 委 員 齋 藤 智 子
欠 席 者	
事 務 局	教 育 部 長 瀬 能 仁 教 育 部 次 長 山 口 朋 史 教 育 部 参 事 丹 野 靖 彦 総 務 企 画 課 長 釜 田 直 樹 科 学 セ ン タ ー 副 館 長 松 本 誠 総 務 企 画 課 主 査 下 濱 辰 哉 科 学 セ ン タ ー 主 査 矢 萩 寿 儀 総 務 企 画 課 主 任 主 事 前 田 亜 矢 子
協 議 事 項	(1) 苫小牧市科学センターのあり方について (2) その他
会 議 の 経 過 概 要	別紙のとおり

1 開会の宣言 . . . 13時30分
(岩倉市長) それでは定刻になりましたので、第7回苫小牧市総合教育会議を開催いたします。日頃から、委員の皆様には本市教育の推進・振興にあたり大変ご尽力をいただいておりますことにつきまして、改めて御礼を申し上げます。まもなく新年度を迎えることとなりますが、平成30年度も引き続きよろしくお願い申し上げます。
2 協議事項
(1) 苫小牧市科学センターのあり方について
(岩倉市長) 早速ではありますが、議題に入らせていただきたいと思います。
「(1) 苫小牧市科学センターのあり方について」を議題とさせていただきます。まずは、事務局から説明をお願いいたします。
(科学センター副館長) 苫小牧市科学センターのあり方につきまして、教育部内の検討結果を報告させていただきます。はじめに、「『苫小牧市科学センターのあり方について』のポイント」をご覧ください。ポイントといたしましては、科学センターは現在の機能を維持することを前提とし、学校教育の補完機能や生涯学習機能を更に充実させることを基本とします。あわせて、本市の工業都市としての特性を生かし、各種企業との連携やミールを活用した科学を軸とする生涯学習の推進、観光資源としての情報発信を重点的に行っていくことといたします。また、老朽化した施設は改築を基本とし、他の社会教育施設との連携が図られる現地改築、出光カルチャーパークの周辺地区、また子育て支援施設との複合化などを視野に、人の流れのハブ機能を有する場所を選択肢とすることも重要と考えているところでございます。
報告書11ページをご覧ください。「第5章 今後の科学センターのあり方」は、

<p>「苫小牧独自の科学教育を目指して」をサブタイトルに、教育大綱、アンケート結果、科学センターを取り巻く現状、また関係団体などの意見を踏まえて5点に集約し、それぞれの項目についての内容と考慮すべき視点及び複数の取組を示し、科学センターの基本的な方針・方向性を表したものとなっております。</p>
<p>続きまして、資料-1でございますが、アンケート及び意見交換会で出された科学センターに求められる点、科学センターの現状、また科学センターが取り組むべき点について、ポイントとして書き出したものでございます。</p>
<p>次に、資料-2でございますが、先ほど申し上げました「あり方」の概要について簡単にまとめたものでございます。</p>
<p>最後に、報告書の16ページをご覧ください。本報告書は、教育部内に精通した「あり方検討会」と若手職員の「意見交換会」に加え、企業・関係団体から意見をいただいで作成いたしました。また、3月22日の社会教育委員会議でも意見をいただき、本日の総合教育会議を経て内容を確定した上、6月議会に報告したいと考えております。簡単ではございますが、以上で説明を終わらせていただきます。</p>
<p>(岩倉市長) 「科学センターのあり方」について、事務局から説明がございました。一つ事前に確認しておきたいことは、これはあくまでも「あり方論」でありまして、こういう方向で施設を展開する等の前の段階で、苫小牧における「科学センターのあり方」について、事務局がたたき台として整理してまとめたものであります。これに対して、これからの時代背景等も踏まえて、この街の子どもたちのため、あるいは市民のためにどのような科学センターがあるべきなのかという「あり方論」でございますので、その辺を踏まえて、まずは一人ひとりからご意見をいただきたいと思っております。</p>
<p>上原委員からお願いします。</p>
<p>(上原委員) 今、説明をしていただきました。まず前段で、前回の総合教育会議の中でこのことについて議論をいたしました。その時にいろいろな問題点等が出されました。その後、検討委員会あるいは調査や会議等をされて、出てきたものが今回の「あり方」であろうと思っております。</p>

前は、旭川市と札幌市の視察を受けて話をさせていただいたのですが、私が一番気になって指摘をさせていただいていたことが、これからますます少子高齢化が進むだろうということからいくと、青少年だけではなく、高齢者も対象にした幅広いといえますか、生涯学習的な性格を持った施設が良いのではないかとお話をさせていただきました。

その点について、今回の「あり方」の案を見てみたのですが、例えばアンケートでは、6ページにありますように、「青少年の科学教育に対するニーズ」や「生涯学習ニーズ」があるといった調査データもありますし、あるいは11ページの「苫小牧市科学センターのあり方について」の4番目に、「子どもから大人まで生涯にわたり科学を学べる施設」というような記述がありますので、そういう点からいくと、この案についてはある程度理解をしたいと思っております。

ただ、今後考えることとしては、前回もお話をしたのですが、施設や展示物の入れ替え、あるいはリニューアル、こういうことが非常に重要となってくるだろうということです。そのような意味では、リピーターを確保することも運営上大きな課題ではないかと思っております。そのような観点でいけば、施設や機能全般にわたって整備をしていくことが非常に関係してくることではないかと思っておりますので、科学センターを運営していく上で、この点が運営上の一番大きな留意点になるのではないかという気がしております。

その点で、この案については、前回議論した内容を踏まえて考えますと、私としては「市独自の科学教育を目指して」という話がありましたので、そういう方向性については大体理解できると思っております。

(岩倉市長) それでは、植木委員お願いいたします。

(植木委員) 私なりの考えを言う前に、少しお聞きしたいことがあります。資料2について、狙いとする「あり方」としての5ポイントはそれぞれの的を射ていると思うのですが、「1.理科・科学の好きな児童・生徒を育てる機能のさらなる充実」の中の⑤に「教職員向けの理科実験研修の充実」とありますが、これは具体的に何か、

例えば北海道には理科教育センターがありまして、教職員が泊まり込んで研修をして、ある程度小学校・中学校のカリキュラムに沿った実験などの実技を学ぶということが実際にされているのですが、苫小牧が目指す科学センターの中にそういったものを考えているのかどうかということと、今ここに書かれている⑤はどのようなことを意味しているのかなと少し思いましたので、現時点で何か考えているものがありましたら、先にお聞かせいただきたいと思います。

(科学センター副館長) 「あり方」ということで、具体的にどのようなものをというの、これからの課題という意識があります。今は、小学校5年生を対象に「科学センター学習」というものを行っております。その時に、必ず先生方からアンケートをいただくのですが、その中では、学校ではなかなかできないような実験等をやってもらいたいというような回答もありますので、そういうものも含めて、逆に先生方も苦労されているのだろうと思いますし、そういう声がありますので、「理科実験研修の充実」ということで記載しております。

(植木委員) わかりました。そうなりますと、学校ではなかなか取り組めないようないわゆる科学実験のようなものを取り上げて、それを科学センターで行おうという形なのでしょうか。

(科学センター副館長) 実験にはいろいろと準備が必要なこともあると伺っておりますので、それも含めてということになります。

(植木委員) わかりました。ありがとうございます。

それでは、そのことも踏まえながら、先ほど上原委員から生涯学習社会を考えての科学センターということでお話がありましたが、私は特に「理科好き・科学好き」な子どもたちを育てるという観点から、少しお話をさせていただきます。

科学センターの大きな役割として、子どもたちは普段学校で理科・科学などを学習するのですが、全ての教師が理科に堪能な訳ではありませんので、そういう意味で、科学の不思議さや驚きなどを科学センターの中で発見できる、そのような施設・場所があることは非常に良いことであると考えています。それで、是非ここは充実させて

いただきたいという思いがあります。

それから、特に苫小牧市は従前から工業の街ですので、企業城下町と言われるくらいに、各企業がそれぞれ日本に誇るものをつくっている訳です。そういう観点で企業のご協力をいただいて、例えば、石油が採れるまでや、原油を採ってからどのように石油製品に変わっていくかなど、そのようなことがわかるような、資料-2の1の③のようなものも併せ持つ施設であってほしいなという思いがあります。

それから、ミールが観光資源であるということは、先ほど市長からもお話がありました。このミールは今や世界に一つしかない訳ですので、これを活用するということは、苫小牧市科学センターの立ち位置の差別化といいますか、独自性を打ち出すという意味でも貴重な施設であるという思いがありますが、実は私はミールだけでは駄目ではないかと考えています。ミールと併せて、日本が現在進めている「ロケット技術」のようなものを同じように展示して、宇宙に目が向くような子どもたちを育てていくことが大事ではないかと思っております。いずれにしても、いろいろなお金が掛かることですので、吟味してつくっていただければと思います。

それから、一つ気が付いたこととして、市民の皆様からのアンケートがございますが、「展示物はどのようなものが良いか」という設問の第2位に、「最新の科学技術が学べるもの」とあります。もちろん「最新の科学技術が学べるもの」はあって良いのですが、私はむしろ身近なものから科学を知り、不思議さを感じ取ることができるようなものを多くした方が、むしろ良いのではないかという感想を持ちました。

(岩倉市長) 佐藤委員、お願いいたします。

(佐藤委員) 昨年、旭川市と札幌市の施設を視察して、それを経て考えていたことなのですが、「『苫小牧市科学センターのあり方について』のポイント」に沿って少しまとめてみました。

どのような施設が望ましいかということに関しては、人口に見合った内容で、特に札幌が近いということもあって、全てが一番であるというのは少々無理があるのではないかということで、展示型から体験型を含めて、皆が集まりやすいような施設が良

いのではないかと思います。

その体験型としては、一つは苫小牧高専の学校案内の一環として、さまざまな実験で、もちろん先生が中心になっていたり学生が中心になっていたりして、苫小牧高専を紹介しながら科学というものを紹介するということが度々あります。それは、産官学としての苫小牧市の活動、または生涯学習としてもリンクしていくものではないかと思っておりました。いろいろな準備をすることは良いのですが、集客の充実といえますか、どのように人を集めるかということで、これはニュースや新聞にも出ていたものなのですが、科学センターはプラネタリウムだけではなくて、リラックスする時間や、今でいうと癒しの時間になるということで、演奏会をやってみたり、朗読会をやってみたりといったことに科学センターを使っているという事例がありました。

そういうものも含めて、先ほど上原委員がおっしゃっていたように、幅広い世代の人たちが利用できるようなものを、科学ももちろん大事ですが、そういうものを合わせた人の流れのハブ機能というところで、まずは人を集めて周知をして、それから繰り返し来てもらえるような「あり方」が良いのではないかと思います。

(岩倉市長) 齋藤委員、お願いいたします。

(齋藤委員) 私自身が考える「科学センターのあり方」を一言で言うのならば、まず子どもたちや市民が、ドキドキした気持ちになれる場所であってほしいなと思います。何度行ってもドキドキときめいて、「ああ、こういう事があるんだ、すごいな」と思える場所であってほしいと思います。

そのためには、新しい展示物もこれから入ることになるかと思いますが、展示物だけではなく、何かそれを補完する工夫が必要なのではないかと思います。子どもたちに限って言いますと、展示物を見て「ピカピカ光っている。ボタンを押したら面白いな」というように、そこからでも全然構わないと思うのですが、そこから先を知ることができないということが結構あると思います。それを、パネルで説明するだけではなく、説明してくださるスタッフの方ですとか、自分からそれを学び取れる工夫ですとか、そうしたものを何か一つ、「また来たいな」、「もっと知りたいな」と思える

<p>ような工夫が大切なのではないかと思えます。</p>
<p>それと、一つお聞きしたいのですが、年間の利用者数については今日いただいた資料にも書いてあるのですが、平日の昼間の利用者数はどのような感じなのでしょう。</p>
<p>(科学センター副館長) 今はまだ春休み中なので多いですが、本当の平日ですと、</p>
<p>200人程度かと思えます。</p>
<p>(齋藤委員) 平日ですと、小学生・中学生は学校に行っていますので、授業で科学センターを訪れることはあっても、学校がありますので、それ以外ではなかなか難しいかと思えます。ただ、せっかく新しい科学センターをつくるのに、平日の時間の利用者が少ないというのは、本当にもったいないことだと思いますので、幼稚園や子育てをしている家庭の方も遊びに来て、子どもたちやその親御さんがそこから科学につながるような何かを感じ取ってくださる場所であれば良いかと思えます。</p>
<p>例えば、お弁当を持って行ってそれを食べるようなスペースがあるとか、幼稚園の子どもたちでも、まだ科学は早いかも知れませんが、例えばただボールがグルグル回るところを見るだけでも、きっと感じることや学び取ることがあると思えます。今日いただいたポイントの中にも、「子育て支援施設との複合化を視野に」ということも書いてありますよね。</p>
<p>それと、もう一つ気になったこととして、資料-1のⅢ「科学センターが取り組むべきポイント」の中の「1. 理科・科学好きな児童・生徒を育てる」について、本当にそのとおりにやっていただきたいことだと思いますが、この項目に限っては、児童・生徒を育てることは大事なのですが、小学生・中学生だけではなく、就学前の子どもたちも科学に触れることができる工夫が何かあれば良いなと思えます。</p>
<p>それから、中学生の利用をもっと取り込みたいということですが、科学センターが一生懸命に頑張って中学生を取り込むためにいろいろなアイデアを絞って準備をしても、中学生の目がそこに行くのかという問題があると思えます。科学センターの話からは少しずれると思うのですが、科学部がある中学校は何校かあるのでしょうか。</p>
<p>(教育部参事) 中学校に科学部はございません。</p>

(齋藤委員) ないですか。
(教育部参事) 正確ではないのですが、科学部として存在している部はないです。
(齋藤委員) そうですか。他市や他の都道府県ですと、恐らく科学部という部活が存在しているところもあるかと思うのですが、科学が好きな子どもたちも、そういう学ぶ機会やきっかけがないと、科学が好きな道に流れて行かない、興味を持つ道が閉ざされてしまうと思いますので、実際にその部活に入りたいかどうかはまた別として、科学センターから提案するようなことができれば良いかと思います。小学校では、科学まではいかなくても、きっと実験クラブなどはあるのかなと思います。中学校でそれがなくなってしまうことも、科学離れの要因になるのではないかと思いますので、むしろ科学センターから提言があったら良いのではないかと思います。
(岩倉市長) 最後に、和野教育長お願いいたします。
(和野教育長) 「あり方」について、今いろいろなご意見が出たのですが、確かに議会の議論の中では、新たにものづくりの視点や、齋藤委員がおっしゃっていたように子育ての要素を入れるということは出ていました。
今回の「あり方」については、今の点も網羅していて、相対的な考えの中では今の2点も入れて考えれば良いのではないかという提案になっております。そういう意味では、見方としてはかなり総花的な「あり方」ですが、大体この中で科学センターというものをつくっていく必要があるかなと思います。ただ、これをこのままつくと、どれほどのサイズになるのかという現実的な問題もございますので、今度は、この部分についてはこういうことを、この部分についてはこういう取り組みをというように、少し具体化をしていくことも必要かと思います。それが一点です。
それと、今上原委員と植木委員がおっしゃっていた展示物の関係について、誤解を招いてしまったら恐縮ですが、科学センターで最先端の展示をすると、翌年には陳腐化してしまうというようなお話もあって、できれば最先端ではなくて、ベーシックな科学の興味を持たせるような展示物に特化してしまうということも、一つの考え方としてはあっても良いかと思います。

<p>(岩倉市長) 一通りご意見をいただきましたが、言い忘れたこと、あるいは言い足りなかったことはございますか。</p>
<p>(上原委員) 考え方等についてお聞きしたいのですが、今「あり方」ということで議論をしておりますが、これがいわば基礎といいますか底辺だろうと思います。これを基にいろいろと展開していくかと思いますが、今回これで方向性が示される訳ですから、教育長がお話されたことに関係してきますが、それに基づいて、スケジュール等も含めて今後の具体的な展開方法をどのように考えているか、恐らく今は言えない面が結構あるかと思うのですが、関連して言えるようなところまで教えていただきたいです。</p>
<p>(教育部長) 正直なところ、現時点では終着点がいつなのかと、そして建設場所がどこなのかということは、まったく未定の状態です。今回、「あり方」をつくりましたが、これはいろいろな団体やアンケートからご意見をいただいた最大公約数的なものとしての位置づけになっています。</p>
<p>先ほど教育長からもお話がありましたとおり、これを基に今後は更に具体的に詰めていきますが、それに伴って「場所」、そして「いつ」といったところも出てくるだろうと思うのですが、現時点では「いつまで」、「どこに」ということは、まったく白紙の状態です。</p>
<p>(上原委員) わかりました。</p>
<p>(岩倉市長) 議会の質疑でも、最近この話題は増えつつあります。今の方向の中で進めるべきということは、一つ軸にあると思いますが、議会では、例えば駅前のサンプラザ跡の展開等でどうだろうというような、今日も生涯学習という話も出ていましたが、もう少し幅広い年代をターゲットにして、子どももワクワクするし、お年寄りもワクワクするような科学センターみたいなものをイメージした方が良いのではないかという具体的な意見も、質疑のやり取りの中ではありました。大きく分けてこの二つなのですが、一つ聞きたいことがあります。齋藤委員のお子さんは、今何歳ですか。</p>

(齋藤委員) 来年度に小学校5年生と、高校1年生です。
(岩倉市長) 例えば、小学生とか中学生の親御さんたちは科学センターをどう見ているのか、あるいは触れたことがあるのでしょうか。
(齋藤委員) 私も苦小牧っ子ですが、実際に私たちが子どもの時はよく行って、それこそ本当に楽しくて仕方がなかったという思い出があります。その時の展示物もまだ残っているので、本当に懐かしいというのはあると思います。
この話からは少しずれるのですが、私の子どもの話ではなく職場の幼稚園の子どもたちのことで、先生等ともお話をしたのですが、苦小牧はどうしてもお母さんが子どもと一緒に公園に行ったり、科学センターなどの子育ての施設に行ったりする機会があまり見られない、どうしてかという、皆プレスクールに入れてしまうからなのです。1、2歳になるともう幼稚園に行ってしまうので、公園に行ってもガラガラ、科学センターに行ってもガラガラなのです。実は、私が勤めている幼稚園では、よく科学センターにお邪魔させていただいているのですが、私の幼稚園以外でも結構来ていますかとお聞きしたら、それ程でもないとのことで、とてももったいないと思います。それで、2歳のプレスクールの子どもたちが行っているのですが、子どもたちは科学センターでどのようにしていますかと聞くと、鏡の部屋を見てキャーキャー大喜びしたり、積み木の部屋で一所懸命考えたりしているとのことでした。科学とかそのようなことは、こちらは特に求めていないのですが、それで良いと思います。親御さんがそこに連れて行くとか、今はきっかけがあまりないのかなと思います。
(岩倉市長) 今の状況を見ると、子育てをしている親世代があまり知らないのではないかという感じがします。これからイメージする科学センターか科学館か、名称がどうなるかは別として、どのようにアクセスしてもらうことが良いのか、もちろんこれについてはまだ結論が出ていないのですが、いろいろな場面でそういうことを考えさせられます。だから、現状を踏まえた上で、これから生まれてくる新しい市民にも通用する科学センターというものは、どのようなものなのかということを考えていく必要もあるのではないかと思います。

そういう観点から、この「あり方」は「あり方」として当然踏まえた上で、議会でも出ているような、もう少し立地的に今までと違った形で、多様な人たちがアクセスする中で科学・理科のようなものに触れてもらう場というイメージが良いのか、もう少し専門的で、場合によっては学芸員のような人もいて、専門的な見地から子どもたちの教育、あるいは大人へのアクセスみたいなことを考えた方が良いのか。その両方だとすると、非常に中途半端なものになるので、これからの時代を考えた場合、どのような方向で科学センターを考えるべきなのかというところで、何か意見はありますか。

(齋藤委員) 私は教育委員になったばかりなので、他の科学館や施設には行っていませんが、個人的に札幌、旭川、釧路に自分の子どもを連れて行ったことがあります。皆さんもご存知だと思いますが、個人的に「釧路市こども遊学館」はすごいと思いました。1階では、小さな子どもたちが砂場で遊ぶことができ、上の階に科学的なものや実験的なものがあります。小さな子どもたちが、その砂場で遊んでそれで終わりなのかというと、やっぱり飽きるのです。そうではないのです。そこから上の階に上がって行って、科学的なものに触れていくのです。

今、どちらかにしなくてはいけない、どちらも良いところ取りにすると中途半端になるというお話もあったのですが、私はそれでも構わないのではないかと思います。

今の苫小牧市科学センターに求められているのは、高度な科学技術を紹介するものではなく、科学に親しんでいただくということが一番の目的で、そのために、まずは来ていただかないことにはどうしようもないと思います。まずは、小さな子どもたちもお母さんと一緒に楽しく遊べると。苫小牧で冬の間が一番困ることは、遊ぶ場所がないということで、それが幼稚園のプレスクールに入るきっかけでもあると思います。ですから、科学センターに来て遊んで、そして他の階にある科学的なものにも触れてもらって、それをきっかけに科学に親しんでもらうというのが、私はベストなのではないかと思います。

(岩倉市長) その方向で考えていると思わないでいただきたいのですが、一つの事

例として、千歳市の「ピッピちとせ」には行ったことがありますか。
(齋藤委員) はい、あります。
(岩倉市長) あのような施設とセットで科学センターがあると、釧路でいうと砂場ですが、そういったイメージでこれからの子どもたち、あるいはお年寄りにも少し科学に触れてもらえるスペースをつくる、そういうゾーンで考えた方が良いという考え方が一つあります。もう一つはやはり従来型の、いかにも教育委員会が考えるような、今の延長線上で考えた場合です。
先ほどの質問は良いポイントだったのですが、現状でも平日と土日との利用者数の差というのは相当ありますよね。
(科学センター副館長) はい、あります。
(岩倉市長) 相当ある中で、運営という意味では同じ人数で対応している訳ですよ。それが、過去であれば良かったのかもしれないですが、これからの時代は、それでも良いとは言えないのではないのでしょうか。やはり、平日でもアクセスしてもらえるようなことを考えていかないと、最初から投資効率が落ちるようなことを考える余裕はないという考え方もありますし、その辺のことで非常に悩む訳です。駅前が良いのか、立地的にはいろいろありますが、そういう方向の中で教育委員会が出している「あり方のポイント」も少し入れながら、これから生まれてくる新しい市民にも通用するような科学センターにしていくためには、どうしたら良いのでしょうか。なぜなら、今の人たちを対象にしても仕方がないからです。これから4、50年間使わなければならないので、これは非常に難しいです。ですから、今の「あり方論」の段階できちんと議論をして、いろいろな意見を出して、その中で一つの方向を示していくという作業が、これからの時代は大事ではないかと思っています。
(佐藤委員) 先ほどの集客の充実ということについて、プラネタリウムだけではなく、やっているところが実際にあるのが、星空をバックにして、例えば朗読を聴いたり演奏聴いたりすることです。寝てしまう人もいる訳で、寝やすいように椅子が倒れたりすることもあります。結局、時間帯が昼間ではなくて、だんだん夜の方になって

きている、働いた後にそのような時間を持ちましょうという意味で、癒しであったり、リラックスであったりという位置づけに変わってきていることが、幾つかのセンターの特色だと思います。昼・夜と、今の開館時間の中で対応するとなると、人の集まる時間帯が少なくなってくるので、対象がどういう人に対してのものなのかということによって時間帯も変わっていくのではないかということ、何となくですが考えていました。

(齋藤委員) 集客のことだけを考えると、苫小牧の施設ではありますが、苫小牧以外の方、近郊の方々にも是非来ていただけるものにしないといけないと思います。プラネタリウムの話がありましたが、プラネタリウムは大きな市町村であれば結構ありますよね。それを見るために苫小牧まで皆さんが来てくれるかということ、来ないですよ。やはり、苫小牧の科学センターならではのもの、「旭川の科学館にはここがある、ここが名物だ、これを見よう」とか、「釧路だったらこういうものがある」というように、「苫小牧はこれがすごいから、これを見に行きたい」というものがまずないといけないと思います。

ミールもあるのですが、ミールに関して少し個人的な感想を言いますと、先ほど植木委員がおっしゃったとおり、ミールをただ展示するだけでなく、せっかくミールがあるからこそ、それに関連付けて宇宙に関わってくる何かについて、ミールをきっかけにもっと世界が広がるような展示の方法を考えないといけないと思います。あと、先ほど佐藤委員がおっしゃったように、働く方はやっぱり夜に訪れたいということで、すし、午前中には小さな子どもたちといったように、同じ科学センターであっても、午前中と夕方というように、その時間帯によって提供するものや企画を変えて考えていかなくてはならないのではないかと思います。

(上原委員) 先ほど少子高齢化の話させていただいたのですが、それと今の調査の関係で、平日の集客体制についての話がありましたが、それは地域でも同じです。今、「ふれあいサロン」というものをやっていますが、これがなぜ人気があるかというと、外出するきっかけをつくってあげているからですよ。

<p>高齢者の方々は、やはり家の中にいてなかなか外出しません。それでも、何かきっかけをつくってあげると外出できます。平日にある程度の時間とお金があるのは高齢者ですから、そういう面からいくと、「ふれあいサロン」的なものをつくるということではなくて、きっかけを与える施設をつくっていったらというような考えを実は持っていました。平日であれば、例えば就学前のお孫さんと一緒に行くこともできると思いますし、そのようなことを少し考えていました。</p>
<p>(岩倉市長) この前、名寄の天文台に行きましたが、あそこにはプラネタリウムがあって、本当に子どもの時以来ですが、プラネタリウムを見ました。市長会の時でしたので、限られた時間ではありましたが。そこで、実現はかなり難しいのですが、苫小牧にはやはりミールがあるので、そのミールがある星に行ったところで故障した、そしてその修理をするというようなシチュエーションがあって、そういう中でプラネタリウムにも入れるようなゾーンがあって、宇宙関係の情報のようなものが、そこでミールを中心としてあれば面白いなということを考えながら見ていました。子どもたちに、現実とは離れた宇宙空間や宇宙に触れさせることは大事だなと思っています。</p>
<p>以前もお話しましたが、市長になって2年目くらいの時に「子ども宇宙サミット」というイベントをやりました。JAXAも絡んでかなり大規模にやったのですが、その時は本当に入りが悪かったです。特に、教育委員会の協力はゼロでした。だから、この街で宇宙は無理だなとその時に実感しました。そのような経験をしているので、それならばもっと気楽に理科や科学に触れさせるようなもの、この前ケーブルテレビで見たのですが、科学センターに行く番組で、昔からある展示物がまだあるのかと思いついて見に行きました。しかしながら、あのような体験と体感を子どもたちにさせるということはやはり大事なのだなと思いました。先ほども意見が出ていましたが、最新のものよりは、オーソドックスな体感・体験をできるものも必要なのだらうと思いました。</p>
<p>(佐藤委員) 旭川か札幌のどちらだったか忘れてしまったのですが、本当に以前からあるように、ダッシュする時間を計るとか、どのくらいの力が一番あるとかという</p>

ような展示が、やはり人気があるそうです。それで、子どもが怪我をしないように見
ていらっしゃる方が高齢の方だったりします。昔から少しは形が変わっているのです
が、人間本来の本能を試すということに関しては、ある程度年の差があってもやはり
皆さん興味を示すので、古くからあるとおっしゃっていましたが、やはり良いものは
残るのだろうなど。自分のダッシュ力ほどのくらいあるのかとか、そういうようなも
のは残っていくのだろうなどと思います。単純な方がお金も掛からないし、施設の準備
も掛からないのですが、ただ怪我をするということは背中合わせにありますという話
はしていました。そこを注意しながら増やしていけば、意外な幅広い世代でも、体力
増進やそのようなところに噛み合わせていけば、苫小牧市科学センターの新しい取り
入れる先になるのかも知れないと思いました。

(岩倉市長) 実はこの「あり方」は、先ほど教育長も言っていましたが、相当総花
的な内容になっていますので、どのような方向でも絞りきれerようになっています。
その幅広いところから、これから意見を集約して具体的な方向が定まっていくことは
良いのですが、私が一番知りたいことは、これから生まれてくる子どもたち、あるい
は地域の人たちが本当に求める科学センターは、どのような科学センターなのかとい
うことです。

(植木委員) やはり親子体験型、親子でなくてもおじいちゃんやおばあちゃんど
も良いのですが、体験型の何か物をつくるような、例えば、和紙をちょっとした物で
つくるのか、マッチがどうして火がつくのかということとか、普段学校で使っている
チョークは一体何でできているのかという辺りも、実は考えようによっては科学その
ものです。できるだけ親子体験型で、科学センターの中に部屋があって、気楽に来て
ちょっと体験できるような、学芸員の問題もあるので大変なことなのですが、そうい
うものが日常にあれば、やはり来る方は来るのではないのでしょうか。

私も利用者数を確認してみたのですが、思っていた以上に入っていますよね。年間
10万人、平成28年度は10万4千人も来ていますので、そういう意味では苫小牧
市は決して少なくはないと思います。それで、もし施設を変えて新しいものにして、

複合的な要素もあつたりすれば、恐らくもう少し増えるのではないかと想定もできます。本来の意味としては、やはり理科・科学好きの子どもたちを何とか増やしたいということがあると思いますので、それを中心にしながら、親子で何か体験できるようなものが、この中にあれば良いなと思います。

(佐藤委員) 小中学校で学区外授業等で訪れるとか、そのような計画は立てられるものなのでしょうか。

(教育部参事) そのようなことも考えられなくはないのですが、実は交通費の問題が一番のネックになります。苫小牧は東西に広いので、子どもたちが科学センターに来るための交通費をどうするかということで、今は逆に前講座で科学センターに来てもらっています。実は、前講座等の利用は非常に増えている状況でございます。

これは、科学センターだけではなくて、実は高専や工業高校等の前講座の利用が増えています。そして、子どもたちの理科嫌いについても付随してお話しますと、実は理科嫌いな子どもが増えている訳ではなくて、高専や工業高校の科学教室が最近ではイオン等で実施されていますが、満員で断るといような状況だと聞いております。

実際、子どもたちが理科嫌いになっているかということ、そうでもなくて、道教委の方で「科学の体験の扉」ということで青少年自然の家などに子どもを集めたりする時にも、大体定員数を超えていて、1月にあったもので300名くらいが参加している聞いています。そういう意味では、行くということは難しくてもそこから発信するという事は可能で、それを受け止めるものとして、今はPTAのレクリエーションなどでも、科学センターを使うというようなことも始まっていますので、発信型というのも一つの方向性として魅力はあるかなと思っています。

(岩倉市長) 今、5年生は必ず来ている訳ですよ。

(教育部参事) はい、5年生は必ず来っていて、その部分の交通費等については予算を取っています。

(齋藤委員) 今参事がおっしゃったように、日高でのでんじろう先生のイベントを私も拝見させていただいたのですが、ものすごい人数でした。やる内容も、それ程お

金を掛けずという失礼なのですが、本当に空気砲をバンッとやったり、静電気の実験をやったりするだけで、子どもたちは大喜びでした。そういうことを科学センターでもできないかなと思います。わざわざ日高や他の施設に行かなくても、苫小牧くらの規模の街で、普段からそういうことに子どもたちが触れられるきっかけがあったら良いかと思えます。

今、科学センターもいろいろな教室を準備されていると思いますが、どうしても準備の関係で事前に予約が必要です。そういう講座も大事だと思いますが、ふらっと訪れた人が、例えば今日は1時から空気砲の実験がありますとか、今日は何時からこういう静電気の実験がありますとか、気軽に参加できるようなものがあれば、もっと子どもたちも来ると思えます。大人はどうしても欲張りなので、科学を好きになってほしいとか、理科の研究者になってほしいとか、そういうことばかり考えがちですが、いろいろな特性のある子どもがいて、どうしても文系のことに興味を持つ子もいれば、全然違う体を動かすことに興味を持つ子もいます。全ての子どもたちを科学好きにしなければならないということまでは私も考えてはいないのですが、どのような子どもでも、そういう体験をきっかけに科学は楽しいものだと思える、そのような教室があれば良いかなと思います。

(岩倉市長) もう一つ、科学センターの活動の中で我々が知っておかなければいけないこととして、例えば日本宇宙少年団はかなり昔から活動しています。最近ではものづくりの方でも、「科学のびっくり箱！なぜなにレクチャー」というものがあって、子どもたちを対象としている訳です。苫小牧としての、例えば紙、電力、石油精製、自動車等、地域特性に絡むことで子どもたちに何か触れてもらえるようなことも一つ切り口としてはあります。現にそのようなことで、自動車については、確か3年前からでしたか、そのような展開もある訳ですよね。まだ小さな芽ではありますが、苫小牧の科学センターでそのようなこともやっています。

(科学センター副館長) 平成8年か9年あたりから、今の「科学のびっくり箱！なぜなにレクチャー」をやっています。

(岩倉市長) 「あり方論」の中では、そのような地域特性にあったもの、テーマをどう考えるかということも必要になってくるのかなと思います。
(齋藤委員) 少しお伺いしたいことがあったのですが、苫小牧は紙の街ということで、「紙フェスティバル」という行事がありますが、それに科学センターとして何か活動したり絡んだりしていることは今まであったのでしょうか。
(科学センター副館長) 資料は提供していますが、参加はしていません。
(齋藤委員) そうですか。
(岩倉市長) 日本宇宙少年団は毎年参加していたと思いますが。
(科学センター副館長) そうですね。
(岩倉市長) 本当に、どのような科学センターのあり方が良いのでしょうか。去年、結構ご年配の方で、久しぶりに科学センターに行って改めて見直したという人もいました。
(佐藤委員) 皆さん行くと楽しいとおっしゃるのですが、行く機会がないので、行く機会をどのようにつくるかということが一つと、このようなことをやっていますよという宣伝を、文字だけではなく皆がわかりやすいようにするのが良いのではないかと考えています。その具体的な方法があれば、科学センターに行くとやはり童心に帰りますし、かつてそうだったというところと、先ほどお話したように、体力測定等に関わってくれば、それはそれで子どもだけではなくて一緒に行く大人も興味を示します。まずは来てもらう、そこがあれば次につながっていくと思いますので、行きやすい場所と行きやすい時間、そこが一つ大事なのではないかという考えはあります。
(岩倉市長) あと、義務教育課程の理科という中で、実際に科学センターの位置づけというのはどうなっていますか。
(教育部参事) 義務教育課程の中での科学センターの位置づけについては、明確になっているものではありません。
(岩倉市長) 先生によって、例えば国語の先生等でも理科・科学に関心を持っているような、いろいろな方がいると思いますが、理科とか科学というものに弱い、例え

ば高校進学でもどうしても室蘭や札幌へ行ってしまうということは、以前から言われている訳です。そのような中で、どのようにして苫小牧の子どもたちに、あるいはものづくりに特化している苫小牧として、科学・理科に早く触れてもらって関心のある子をどんどん育てていくような道筋を付けてあげるのか、どうしても教育委員会の中での取組ということになりますが、それにだけ特化してやるというのは、なかなか難しいですね。

(教育部参事) 難しいとは思いますが、先ほど説明したように、子どもたち自身が理科をそれほど嫌いではないということはベースにあって、ただ、この「あり方」の中でも述べられているのですが、教えている先生方の中に理科に対する難しさを感じている部分が多いということは、現実としてあります。例えば理科の実験は、他の授業の準備と比べて2倍から3倍の準備時間が掛かるというような現状もあります。昔よりも安全対策が厳しくなっておりますので、私が若い頃と比べて、理科の実験準備には恐らく倍くらいの時間が掛かっているというのが現状です。

そういう意味でいくと、子どもたちより先生方の負担があるので、この中でも触れられていますが、例えば科学センターにそのような補完・研修機能を持たせるということも、一つの方法としては有効であると思います。子どもが日中に行くということは難しい部分もありますので、そういう方法もあるのかなというふうに考えています。

(植木委員) 中学校は理科専門の教員が教えますから、これは問題ありません。問題は小学校の方で、これはもう音楽の先生だろうと国語の先生だろうと社会の先生だろうと、皆と一緒に理科を教えます。その手順なり方法なりを正しく習得せずに、なあなあでやってしまうと、なかなか本来の科学の面白さみたいなものを伝えきれません。そのような現実があるので、資料-2の1の⑤に「教職員向けの理科実験研修の充実」とありましたから、そのような先生がちょっと科学センターに来て、ここはどうやるのかといったことを学ぶことが可能であれば、学校現場に戻ってそれを子どもたちに正しく伝えて、そうすると興味を持つ子が増えるかも知れないということです。ここについても、実は大切な役割を担うことになるかも知れないという思いがあっ

たものですから、冒頭にお聞きしました。

(岩倉市長) この前のCCS講演会で、らんま先生が子どもたちに対して実験していたのを見ましたか。あれは環境についてでしたが、理科にもつながる実験もあって、非常に面白おかしくやっていました。子どもたちの参加は少なかったのですが。

今後、多様な意見を聞きながら、教育委員会として次のステージに上がっていくことになる訳ですが、たたき台みたいなものはいつになりそうですか。

(教育部長) まず、最初の目標となるのは6月定例市議会です。常任委員会で「あり方」を示しますので、それが最初の報告になるかと思います。今日もいろいろなご意見をいただきましたので、それに若干の修正を加えていくことになるかと思いますが、次のステップとしてより具体的なものをとということになりますと、いつまでにとということになると、なかなか難しいです。

(岩倉市長) 財政的な問題もありますね。現実的には、時間の掛かる作業になっていかざるを得ないのですが、いわゆるコンセプトワークだけは時間を掛けてやっていく必要があるのではないかと思います。

(2) その他

(岩倉市長) その他ということで、関連していても結構ですし、何か教育委員会の考え方等で聞きたいことはございますか。

(上原委員) 一点、平成30年度の「教育行政執行方針」を検討する際にも少しお話をさせていただきましたが、現在「苫小牧市教育大綱」があって、対象期間は4年間なので、今年度で終わります。そうすると、平成31年度に向けて新たな「苫小牧市教育大綱」をつくらなければいけないと思います。それで、空白期間があるのはおかしいと思いますので、今年度につくる必要があると思っているのですが、そのことを「教育行政執行方針」の中に入れたらどうかという話をさせていただきました。そ

の時はある程度盛り込もうという話で進んでいたのですが、法律上は「地方公共団体の長がこれを定め総合教育会議で協議する」ということになっていますので、総合教育会議の中で平成31年度以降の新教育大綱をつくらなければなりません。それについて今後どのように考えていくか、あるいはスケジュールや時期等、前回つくった時も、確か10月くらいに策定しましたが、非常に時間が掛かりますので、その辺も考えて対応していかなければいけないと思うのですが、その考え方について少しお聞きしたいです。

(教育部長) 前回は「苫小牧市教育大綱」をつくる時に、この総合教育会議を活用させていただいて、確か4回くらい開かせていただいたと思います。それで、いろいろな意見を伺った中で、10月策定というスケジュールでしたので、新教育大綱につきましてもそのようなスケジュールで策定していきたいと思っております。

(上原委員) わかりました。併せて、7月には市長選があります。そうすると、新市長が決まった段階で、教育大綱についてもその市長の考え方が示されることがあるのかも知れません。ただ、行政の継続性ということからいけば、4年間のことを決める訳ですから、それも平成31年度からということですので、市長選後ということでは理解してよろしいのでしょうか。

(教育部長) そうですね。着手はその前からということになるかと思うのですが、もし市長が変わった場合には、最後の策定段階でまた軌道修正があるかも知れませんが、ゴールについてはあまり遅くならないように、前回と余り変わらない時期に策定を目指すということを考えています。

(上原委員) わかりました。

(岩倉市長) これは、法律に基づく教育大綱ということになりますので、きちんと時間を掛けて、前回は4回ですが、数回にわたっていろいろなご意見をいただきながらということになろうかと思えます。

その他、何かございますか。

(一同「なし」の声)

(岩倉市長) それでは、これもちまして第7回苫小牧市総合教育会議を終了させていただきます。

3 閉会の宣言 …… 14時40分